「日常の外出と路線バスについてのアンケート」分析結果

調査概要

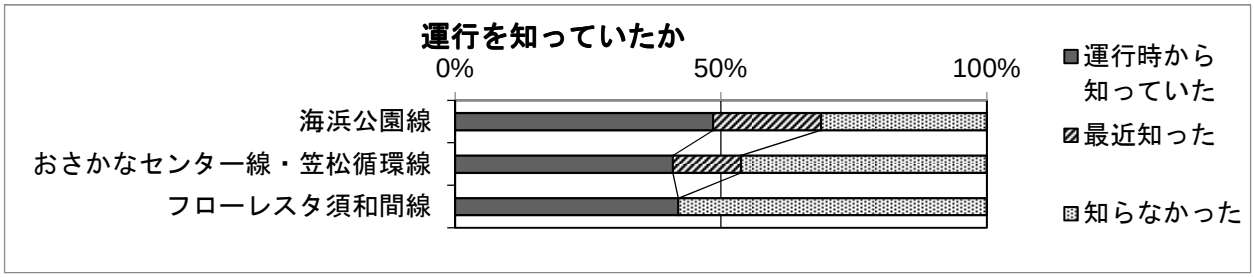
- 配布：役場のデータにより無作為に抽出した3000人を対象に11月5日に郵送配布しました
- 回収：回答者には、11月15日までの行動等を記入してもらってから郵送（着払い）を依頼しました
- 12月25日までに回収された878通を分析対象としました
- 単純集計として主要な分析結果は別途資料のとおりです

回答者の属性（問D）

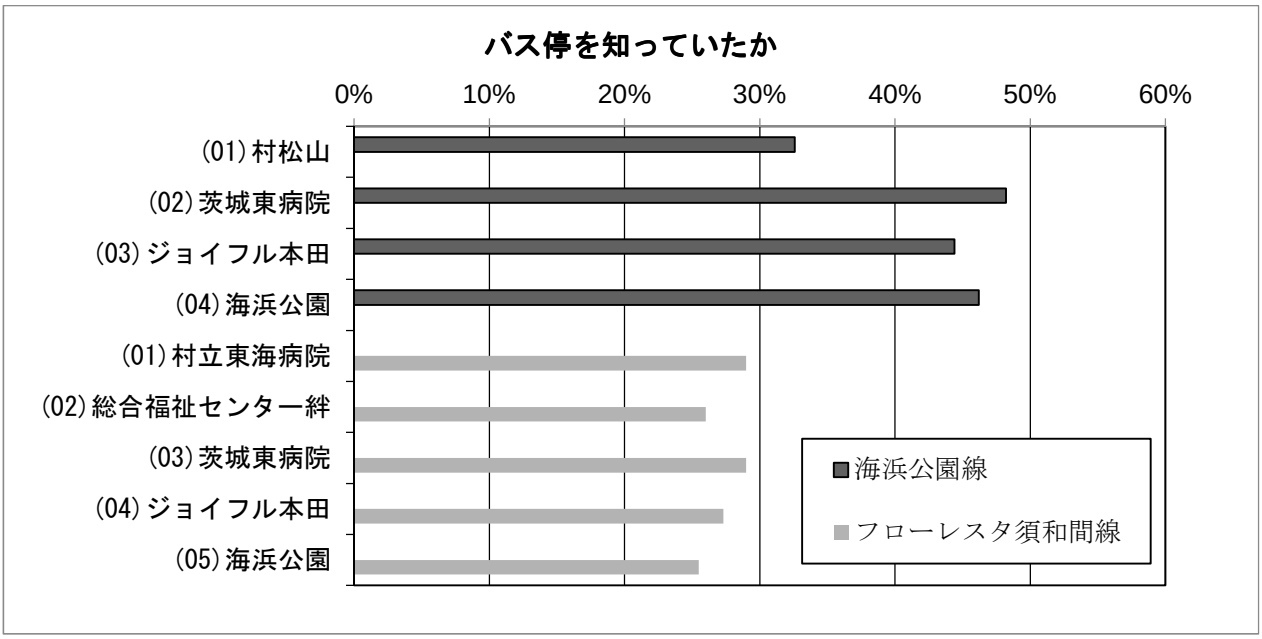
- 60歳以上が全体の50%と、比較的、公共交通のニーズの高い高齢者から多く回答が得られています
- 性別では、女性が61.0%と多数を占める結果となりました
- 職業では、会社員・公務員が 29.3%を占める一方で、専業主婦・主夫を除く無職が24.4%となりました
- 全体の 83.7%が運転免許を保有しており、また全体の 82.5%が自分で運転をする人です。「自由に使える車」があると答えた人は91.5%になっており、自分で運転をしなくても家族の送迎等によって利用できる車のある人がほとんどという状況にあります。
- デマンドタクシー「あいのりくん」の登録は、回答者の18.5%でした。

路線バス運行の周知状況（問C）

- 路線バスの周知の状況は、路線によって違いが見られました
- 運行を知っていると答えた人の割合は、東病院・海浜公園線では68.8%に対して、おさかなセンター線・笠松循環線では、53.8%、フローレスタ須和間線は 42.0%でした



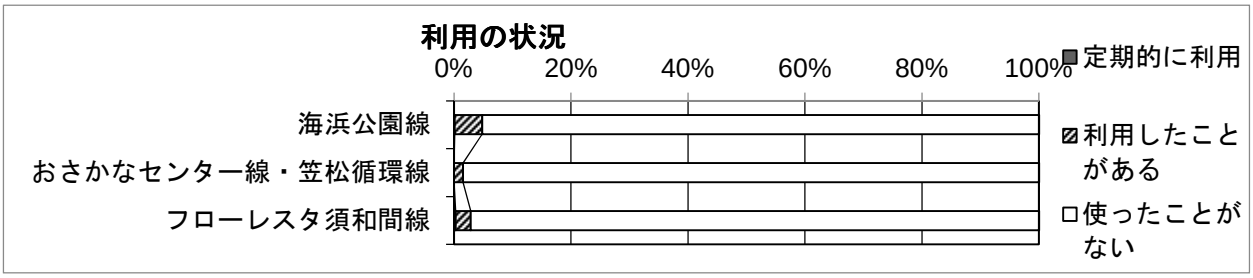
・ また目的地バス停でも同様の傾向にあり、東病院や海浜公園では全体の約 4 割の人が知っているのに対して、須和間線の改変で村立東海病院や福祉センター絆を通っていることを知っているのは、約 2～3 割となっています。



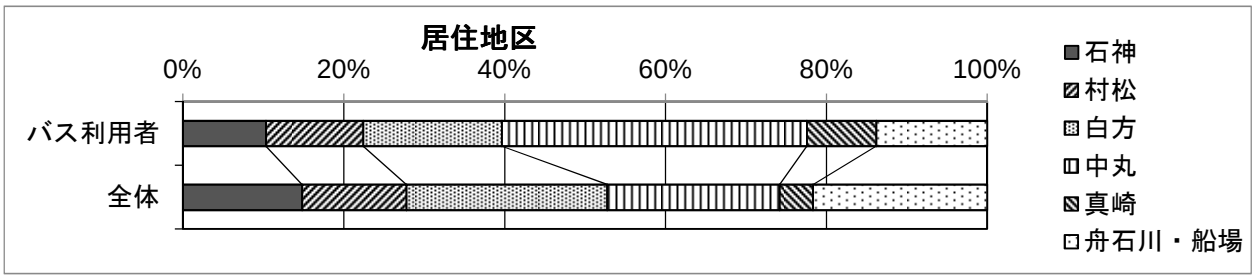
利用の状況（問 C）

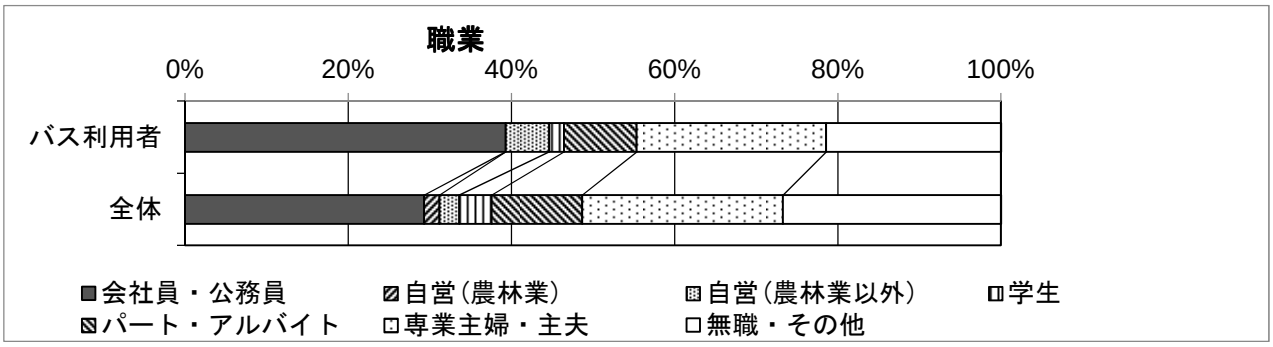
・ 利用したことがある･定期的に利用の合計は､東病院･海浜公園線では 40 名(4.8%)、おさかなセンター線・笠松循環線では 12 名(1.5%)、フローレスタ須和間線は 21 名(2.9%)でした。

・ いずれか一つ以上の路線を利用したことのある人は、58 名(6.6%)でした。



・ バス利用者の属性として、下の図のように、学区では中丸と真崎で全回答者に比べて大きな割合を示しており、利用傾向が高いと言えます。職業では「会社員・公務員」でバス利用者が多くを占めており、通勤での利用が有意であることが伺えます。



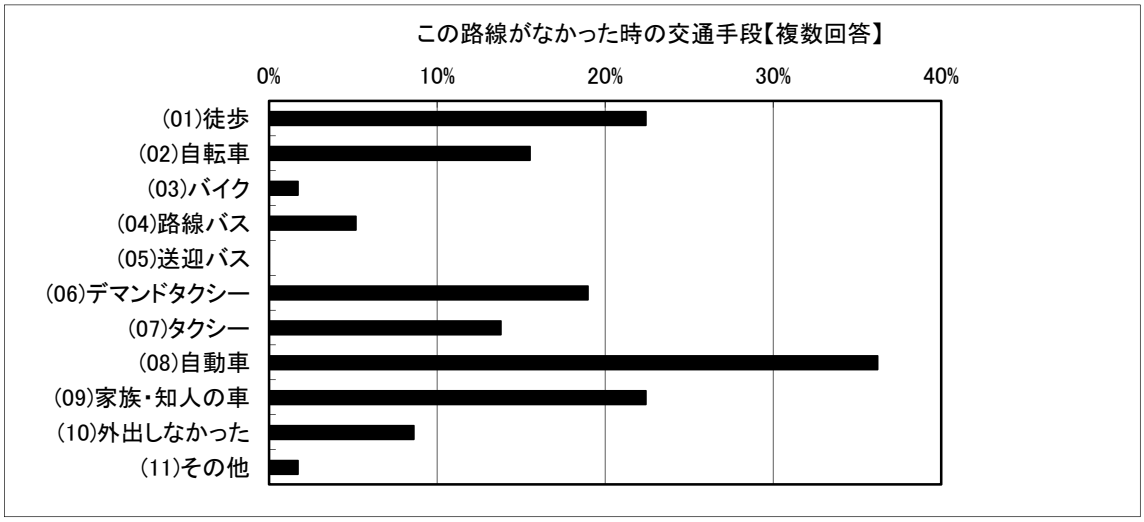


・ 路線バスがなかったときの交通手段について一つの図に示したものが下図です。

・ デマンドタクシーからの転換が見られるものの、その一方で、マイカーや家族・知人の車、またバスを使う目的地への外出はなかったとするものも、比較的多く見られます。

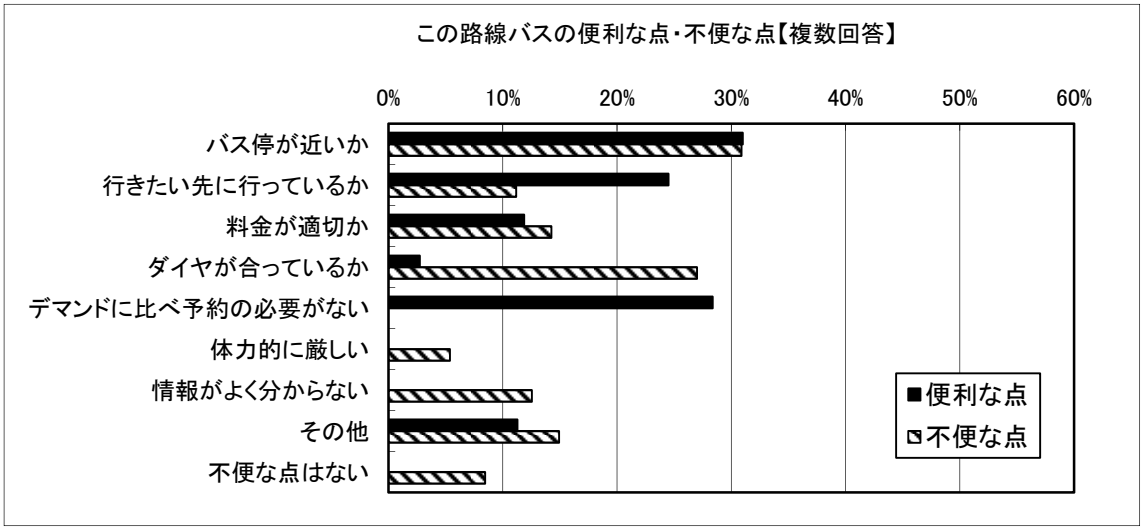
・ グラフではこれらの 3 つの項目の回答数は延べ数しかわかりませんが、個々の回答者ごとの回答パターンを確認したところ、58 名中の 36 名(62.1%)が、この 3 つのいずれかに答えていることがわかりました。

・ このことから、今回の路線バスの改変により、マイカーや家族送迎からの転換、またこれまでいけなかったところに行けるようになったという、当初の期待どおりの効果を挙げていると言えます。



路線バス運行のサービス水準の評価（問 C）

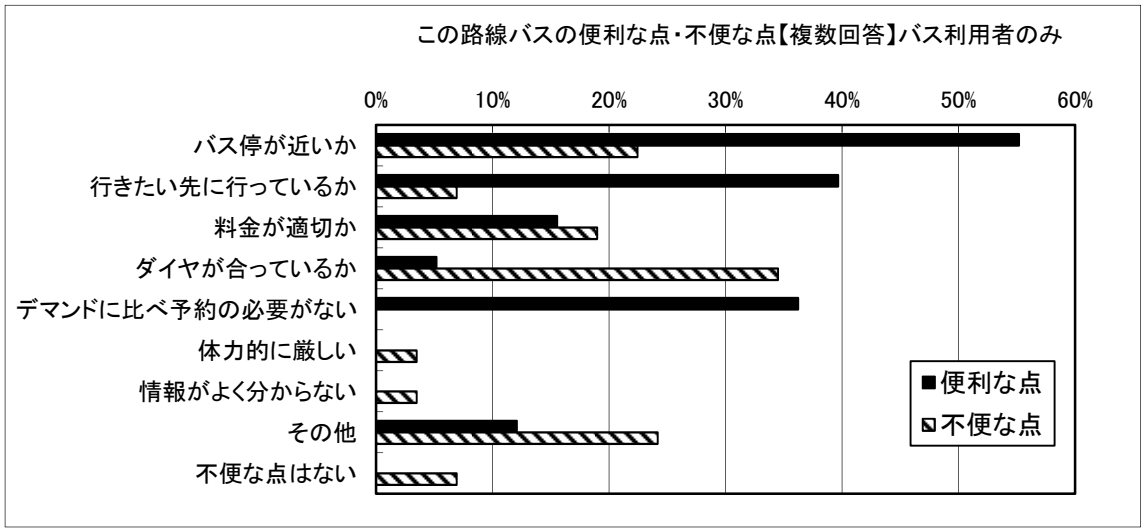
- 便利な点と不便な点に分けて聞いた結果を一つの図に示したものが下図です。これは現在までの利用したことのない人にも案内チラシを見て評価してもらったものです。
- 「行きたい先にバスが言っているか」については、便利とする人が不便とする人の 2 倍以上になっており、概ね多くの人が望む先に行ける路線であると言えます。
- 「バス停と自宅が近いかどうか」は、便利とする人と不便とする人がほぼ同数という結果になりました。具体的な場所等によってさらに分析を行う予定です。
- 「料金が適切か」についても、便利とする人は不便とする人よりやや少ないものの、差はあまり大きくありません。
- このほか、「ダイヤがあわない」「情報がよくわからない」との回答が目立っており、こういった点でさらなる工夫を検討することが重要と考えられます。



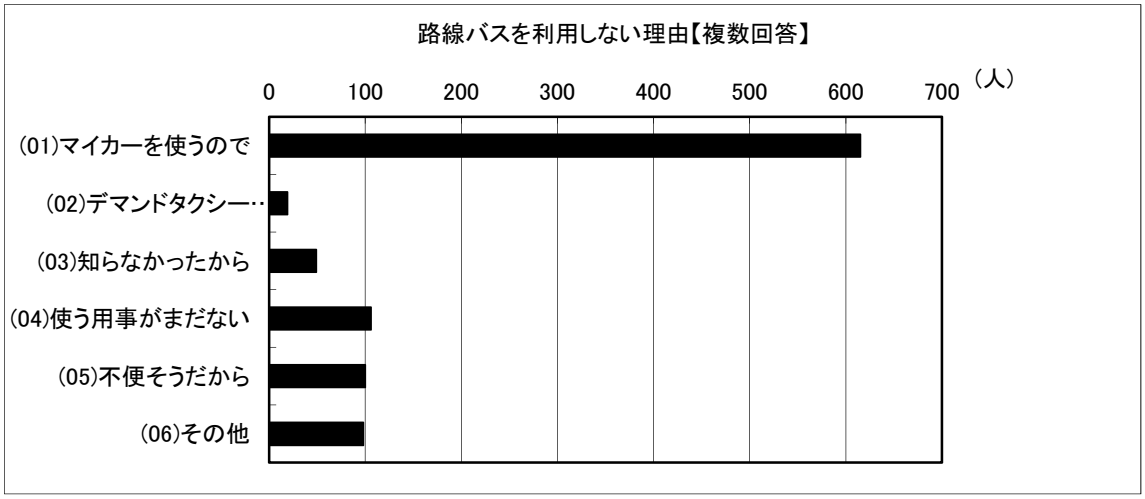
・ バス利用者のみについて見たものが、下の図です。

・ 全員に聞いた結果の上の図と比べて、バス停が近いこ、行きたい先に行っているという、便利な点の回答が目立っており、これらの条件の良い人が利用していることが確認できます。

・ 「ダイヤ」は、上の図と同様に不便な点の指摘として最も多く、さらなる工夫が求められていると言えます。



・ バスを使っていない理由を聞いた結果が下図です。使っていないと答えたなかの767名から回答がありました。

・ 「使う用事がまだない」と答えていて、きっかけがあれば利用する可能性のある人がいることがわかります。

・ その一方で、不便そうだから、知らなかったからと答えている人もいて、まだ潜在化している需要もあることがうかがえます。